

アフガンの荒野に灌漑用水路 25.5km 完成

和田航一

何気なく見ていた夜のテレビで、日本人の医師中村哲が手がけていたアフガニスタンの荒野に建設していた灌漑用水路 25.5km が完成したことを知った。

私も土木屋の片割れ（機械担当）で、水路と言えば日本国土開発が施工した武蔵水路でコンクリート・スリップフォームの製作と施工に参加して一年ほど前には、利根川から荒川へ満々と水をたたえて流れる水路を見に行つて会報の表紙写真とした。

アフガン平和は武器では平和は取り戻せないと思うほどに、中村医師の偉業を知りたくて調べた。中村医師は現代の野口英世であり、台湾のダムを建設し豊かな緑野を創った八田与一であろう。（台湾の八田与一については川本正之 OB が詳しい）

中村哲医師は 1984 年にハンセン氏病対策の目的でパキスタのペシャワールに渡つた。1976 年から 10 年間のソ連侵攻に続くアメリカ軍などの軍事作戦で国内では多くの死者、難民が生まれた。国民の 8 割は農民で戦乱以前は穀物など自給できたが、2000 年からは戦乱に加えて気候変動による記録的な旱魃で農地を失った農民はタリバンなど地方軍閥の傭兵になるか、国境を越えてパキスタンやヨーロッパまで逃れている。貧困と飢餓は彼らに武器を持たせ、ケシの栽培に走らせてしまった。

中村医師は、飲料水と食糧の自給、教育がアフガニスタンの治安回復になると考え、アフガニスタンに活動拠点を移し、井戸や学校、病院建設を進めた。4,5 千メートルの山脈から年間を通して雪解け水を流しているクナル河に水門を設けて、灌漑用水路を作り、雪解け期の洪水には遊水池を作り、乾ききった大地を潤して最下流のカンベリー砂漠に緑の村を建設することに着手した。2003 年着手以来 7 年間かけて 25.5km の灌漑用水路（カレーズ）や遊水池を完成させて毎秒 6 トンの通水が得られた。この水路により 3000 ヘクタールの農地が生まれ 15 万人の農民が生活できる。これらの農地からは、すでに小麦、米、野菜、サツマイモ、トウモロコシ、綿花などが収穫され、クローバが茂る緑の大地となり、多くの農民が故郷に戻りつつある。

中村医師は、医師でありながら水利工学を勉強して毎日 600 人余もの現地農民と一緒に働いた。工事は重機を使わずツルハシとハンマー・たがねで岩石を掘り、100 年間は農民自らの力で維持するためにもコンクリートを使わず、日本の伝統的な治水技術を活かし、豊富な石材を利用し針金で蛇籠を作った。崩壊を防ぐため柳の木も植えている。工事に要した費用 14 億円は、医師が結成した NPO 法人ペシャワール会が集めた寄付金で賄った。

中村医師（64 歳）の故郷は福岡の柳川で、江戸時代に作られた筑後川の山田堰、水路と柳の並木で有名なところでもある。

現在のペシャワール会は法人格のない任意団体（NPO）3500 人の会員で、会員と支援者の寄付で運営され、入案内によれば、一般会員 3000 円、維持会員 10,000 円、団体会員 30,000 円の年会費とされ、会員には年 4 回会報が送られる。郵便振込 01790-7-6559 加入者欄に「ペシャワール会・入会希望」と記入してほしいとあった。

テレビを観た感銘が醒めないうちに私は入会金を持って郵便局に走った。